

【完結】 偽りの幸せとク ズの結末

光の甘酒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

“人間のクズ”この言葉が俺以上に似合う人なんて他にいないだろう。
偽りの幸せで塗りつぶされた人生は。果たしてどんな結末を迎えるのかな。

目次

本編

第1話	あやまち	1
第2話	無自覚の良心	8
第3話	絶望の観覧車	12
第4話	暴かれるウソ	20
第5話	はつこい	26
第6話	鬼にでもクズにもなろう	37
第7話	喪失	45
第8話	謝罪	56
第9話	あたしの全力(物理)	64

第10話	デモデモダツテ	71
第11話	笑顔の別れ	76
第12話	甘いキス	87
第13話	偽りの幸せとクズの結末	102
最終話	偽りの幸せとクズの結末	116
RU EN D		
Grand Finale		
EX1.	偽りの幸せとクズの結末	H
APPY EN D I		128
EX2.	偽りの幸せとクズの結末	H
APPY EN D II		137
EX3.	偽りの幸せとクズの結末	H

第1話	二人のみらい	163
r	E X : T e n y e a r s a f t e	A P P Y E N D f i n 150

—本編—

第1話 あやまち

“人間のクズ”

この言葉が俺以上に似合う人なんて他にいないだろう。

幸い容姿が良くこの世に生を受けることができ、成績優秀・スポーツも人並み以上にできる。

さらに普段の仮面優等生っぷりからは皆からの評判は上々。

そんな俺だが、その正体は決して一人では生きられない弱い生き物。

昔から何かにすぎり、もたれかかり、それでメンタルの平穏を保ち、優等生を演じる。性に目覚め始めた中学あたりから、その依存対象は女の子になり同級生、上級生は関係なかった。高校生となった今はもはや社会人の女性まで見境なし。

『お前なんか……お前なんかあああああああ』

中学生の頃、「もたれる壁のひとつ」にしていた女の子に刺されたことがある。

当時から優等生な好少年を演じていたこともあり、幸いにも相手の言い分は悉く聞かれることはなく、刺した相手が執着するあまりの精神異常を起こした結果の身勝手な犯行で、俺は完全な被害者という扱いになった。

さすがにあれは死にかけたね。今でもうつすらと傷跡が残っているし。

「ん……陽葵くん……」

とある日俺は女の子とキスをしていた。

ここは商店街のパン屋。俺はここでバイトをしているわけであるがすでに就業時間は終了している。ではなぜここにいるのか？それはこのパン屋の娘さんの部屋にいるからだ。

「沙綾……かわいいよ」

俺は知ってる。こういえば喜ぶんでしょ？

「陽葵くん……もつと……」

俺はこの子と付き合っている。

いやこの子”とも”というのが正しいか。

俺は一心不乱に唇を貪り、紅潮する沙綾の顔を凝視し、恥ずかしがって視線を逸らすしぐさを楽しむ。

「陽葵くん……わたし……！」

沙綾は体をほてらせ、自身が来ているYシャツのボタンに手をかける。

おっと、これ以上はいけない。

「沙綾、約束だよ？」

「……そうだよね」

俺には明確なルールがあった。

“一戦は超えない”

今やっていることも大概クズだと思うが、これは俺に残された最後の良心・・・人間らしいところかもしれない。

よくわからないがその直感だけは大事にしたかったのだ。

その後の時間俺はベッドに寝転がり、ずっと彼女を抱きしめて過ごしたのであった。

※

「もっと一緒にいたかったよ・・・」

「明日もバイトあるし、また来るからさ。今日は我慢。ね？」

「・・・そうだね！明日も逢えるし我慢我慢！それに・・・さっきまでの幸せ成分で今日は持ちそう／＼／＼」

「うわ、沙綾がめっちゃ可愛いこといつてる」

「陽葵・・・」

「沙綾・・・」

俺は俺が嫌いだ。こういう生き方しかできない俺は嫌いだ。

俺なんて早く死んでしまえばいい。

でも死にたくない。こういうときはどうすればいいのか……

「次だ……次へいこう」

早く……はやくいかないと……

俺は“次の子”がいるところへ向かった。

※

少し暗くなってきたあたりで俺は「白金」と表札のついた家に入った。

「隣子、今いいかな？」

「陽葵さん……ってどうしたんですかその手!？」

さて、ここらで自己紹介をしよう。

俺の名前は弓神陽葵（ゆがみ はるき）

高校2年生だ。

そして俺は

この世に存在してはいけない

“人間のクズ”だ。

第2話 無自覚の良心

「どうしたんですか… その手!？」

「ああ… ちよつとね」

「ちよつとじゃないです… ! とりあえずこっちに来て、手当します… !」

燐子はそういうと救急箱を持ってきて俺の手当をする。

彼女の手際よく、優しく行われる手当は俺の心に安らぎを与えていた。

「ほら、これで終わりましたよ」

「ありがとう、燐子」

手当が終わり、燐子は優しく微笑む。

その笑顔が眩しくて。俺は思わず燐子を抱きしめてしまった。

「きゃっ／＼陽葵さん… ?」

「聞かないのかい…?」

俺は何でこんなことを聞いてしまったんだろう。

こんなことを聞く必要なんてない。ただ黙ってことをすすめて、偽りの好意を向ければ済む話なのに。

「だって陽葵さん、私がどうしたんですかかって聞いた時、応えませんでした…なら聞かされたくないことなのかなって…それなら私がやれるのは手当と、陽葵さんを励ますことだけです…」

眩しい微笑みを俺に向け、燐子はなんの躊躇いもなくさういう。

心が苦しくなった。何故だ?意味がわからない。さつき沙綾と別れた時だって自分にイライラして拳が血まみれになるまで殴って…

気がつく俺は燐子を力いっぱい抱きしめていた。

「燐子、ごめん、ごめんな…」

俺は泣きながら燐子に謝っていた。

何に對して謝ったんだろう？

夜に押しかけて手当までしてもらったことだろうか？

それとも俺がキミを裏切っていることだろうか？

「いいんです。： 陽葵さんが隣いてくれるだけで。 陽葵さん。： 好きです。：。」

”好き”

なんて薄っぺらい言葉だろう。

他人に溺れ、もたれかかるのが常だった俺は好きだなんて感情はわからない。

しかし好きという言葉は人を安心させ、無条件で喜ばせる魔法の言葉。

この一言を言うだけで上手くいくのなら意味なんかわからなくても楽だからどんどん使えば良い。

「ああ、俺も好きだよ。 燐子」

俺はいつも通りそう返す。意味もわからないのに。

ただ単にこの場を綺麗におさめたいが為に。

しかし、いつもやっているそれだけの行為のはずなのに。

俺はとんでもない不快感を感じ燐子と別れたあと盛大に嘔吐をした。

「もう…：限界なのかな」

無自覚の良心。

俺の本質は依存、利用、そして仮面をかぶること。

そして他人の好意を踏み台にして俺の平穏を保つ。

それがアイデンティティだった俺の心境にちよつとずつ変化が訪れていて、崩壊しつつあることを俺は何となく感じながらも無理矢理押さえ込み…：

そして順調に、崩壊への歩を進めて言っているのを自覚しつつも認めたくないのであつた。

第3話 絶望の観覧車

最高の外面のよさ、理想の彼氏像。自らの平穩のためならそれすらも演じ切り、そして誰かにもたりかかり利用することすら辞さない俺。

しかしどうも最近調子が悪い。その心の平穩のためだけに付き合っているはずの沙綾や燐子。

いつも通り俺を満たして、そのシチュエーションに飽きたら次の子にシフトする。

ただそれだけの存在のはずなのに。

“なんで俺は沙綾と部屋でいちやくく時間に感じたことのない幸福を感じているのだろう”

“なんで燐子のやさしさに触れて心が苦しくなるのだろう”

最近考えるのはそのことばかりだ。

「わかんないなあ……」

なんでもの子たちを利用して、俺は罪悪感を感じているのだろうか？

「陽葵！なにがわかんないの？」

「え!? ああ、なんでもないよ」

「えー！きになるじゃーん！」

隣に歩くのは氷川日菜。

俺の“友達”だ。

「せっかくデートなのに上の空なんて女の子に失礼だよ！」

「ごめんごめん、じゃあ入ろうか」

日菜といると何も考えなくて済む。

荒れに荒れた俺は唯一の友達である日菜にすがり、またしても自分が平穩を得る。いつもの調子を取り戻す。ただそれだけにためにここに友達すらも利用している。

「高校生2枚で」

水族館の受付でチケットを購入し、二人で中に入る。

「いやー楽しみなだなー！水族館なんて久しぶり！」

「そーいや俺もあんまり来なかつたな。今日は楽しむか！」

楽しむ？なにを？

「ほらほら陽葵！まずはコッチだよ！」

入った瞬間、巨大なゲート型の水槽が俺たちを出迎えてくれる。

色とりどりの魚、優雅に水中を舞う大きなエイ。

その美しさに目を奪われていると日菜が大変興奮した様子ではしゃいでいる。

「すごいすごい！へー！こんなふうになってるんだ!!」

「おいおいはしやぎすぎだぞ?」

「えー? いいじゃーん! だつてすごいんだもん! あ、あつちでイルカショーやってるっ

て！」

「お、おい日菜！」

日菜は俺の手を掴み、引き、イルカショーをやるコーナーへ誘導する。
ちようどショーが始まる時間だったようで、俺たちはそのまま席に着く。

そう “手をつないだまま”

「おおおおお！すごい！イルカってなんで重たいのにあんなに高き飛べるんだろ??」

「そりゃイルカだからさ」

「答えになってないぞー！」

本能を隠し、愛想を振りまいて多くの人を魅了するイルカ。

本性を隠し、仮面をかぶって多くの人と仲良くなる俺。あのイルカは俺だ。

いや、イルカと一緒にするなんてイルカに対して失礼だ。

「ふう！楽しかった!!」

俺と日菜は一通り水族館内を見て回った。

終始手をつないだまま、だ。

「このあとどうする？少し早いけどメシでもいくか？」

「んー・・・あ、その前にあれに乗りみたい！」

日菜が向いた先にあつたのはこの水族館を象徴する観覧車だ。

きらびやかなイルミネーションが夜の景色に溶け込み美しく見える。

「いいよ、じゃあ乗ろうか」

観覧車に乗り込み、上昇を楽しむ。当然俺は日菜と隣り合わせで座っている。手もつなぐれたままだ。

そしてやがて、てっぺんに到着した観覧車から見えるのはとても美しく、そして汚い夜景だった。

「うわー！きれいだねー!!」

「うん、すごいなこれ」

そんなことをいう俺。夜景なんて社畜どもが働いているビルの光に薄汚い繁華街のネオンに……どうせそんなものが固まって、それがきれいに映るだけの虚像だ。観覧車から見える夜景から「お前は俺だ」といわれているようがしてならない。

「いやー陽葵！今日は楽しかったよー」

「ああ、俺もひさしぶりにはしゃいじやったよ。やっぱ日菜といると楽しいなー」

そんなことを言う俺。楽しかったんじゃない、他の余分なことを考えなくていいってだけだ。

「そっか。ふふふ」

そうやって笑う日菜を見て俺は一瞬心臓が跳ねるのを感じた。

“日菜にももたれかかってしまおうか”

そんな感情が俺に芽生えたのだ。そうなれば俺がやることはただ一つ。いつも通り、他の子にやっているように好意を伝えるだけ。

1日デートして手をつないで観覧車まで乗ったんだから大丈夫。告白としてのシチュエーションは最高。そう言い聞かせて俺は言葉を出す。

「なあ、日菜。実は俺……日菜のことが」

だがそれを言い切ることは……

叶わなかった。

「ねえ陽葵。いつまで仮面を被っている気なの？」

俺は日菜の予想だにしていけない言葉に虚ろを突かれた思いがした。

「私知ってるよ？ 沙綾ちゃんのこと、燐子ちゃんのこともね」

その日菜の言葉は・ ・ ・俺を絶望に叩き落すには十分な威力だったんだ。

第4話 暴かれるウソ

「え……なんで……いや……どういう……」

「うわー、目に見えてわかるくらい動揺してるねー」

日菜が言い放った言葉。

俺はそれが一瞬理解できず戸惑い。観覧車が下につくまで、ぶつけられた言葉を咀嚼し、味わうことでその意味を理解する。

「なるほどねー、陽葵はああやって女の子たちを落としてきたわけだ。さすがモテる人は違うねー。一日デートして、手間でつないで、観覧車で二人つきり。そりやうまくいくよねえ……相手があたしじゃなかったらね」

見透かされている。俺はこいつに考えていることを見透かされているんだ。

なにが他人の事なんてわからない、だ。

このウソツキめ。

「それでき。いつまで仮面被ってるのって聞いてるんだよ。あたしと今日遊んだのだった何かあったからなんでしょ?」

「お前は本当に……なにもかも見透かしてるのか……?」

「何もかもじゃないよ。それに前々から無理してるのバレバレ。このタイミングであたしと遊ぶってことはそろそろ限界が近いんじゃない?」

「お前に……お前に何がわかるッ!」

たまらなくなった俺は大声を出す。しかし周りの喧騒に音はかき消され、周辺の人が俺たちを気にする様子はない。

「別に。キミのことなんてわかんないよ? まあ大体察しはついてるけどね」

「俺はこういう生き方しかできないんだ……! これをやめたら……俺は俺じゃなくなる……」

「だから無理してるってこと? 虚しくない? 他人まで巻き込んでさ」

「虚しいとか虚しくないとか……俺が決めることだ」

もういい。こいつと一緒にいるのはやめだ。

さっさと切り上げて・・・沙綾や燐子にもたれかかろう。
そうすれば・・・少なくとも今よりはいい状況になるはずだ。

「もういい、俺は帰る」

「そっか。その前に一つだけいいかな」

日菜が俺と距離と詰めてくる。

「一体何をするつもり・・・ぐむう!？」

「ん・・・」

刹那。

俺は日菜に・・・

唇を奪われていた。

「ん・・・んんっ・・・ぷはっ」

数秒間。たったそれだけのはずなのやけに長く感じた。

「日菜……一体なにを……」

そう言いかけた瞬間。

俺は……みてはいけないものを見てしまった。

「陽葵……くん……?」

「陽葵さん、いったい……これは……?」

目線の先。

そこには……沙綾と燐子がいたんだ。

その表情は俺がさつきまでやっていたことを……日菜とキスしたところを見られていたことを意味していた。

「沙綾、燐子……! 違っ……!」

「急に呼び出されたと思ってきてみたら……そういうことなんだね……」

「陽葵さん……ひどいです……!」

そういつて二人は目に涙をため、そのまま走り去ってしまった。

「沙綾! 燐子!」 ガシッ

二人を追おうと走り出そうとしたとき、日菜に腕をガシッつと掴まれた。

「離せ!」

「追ってどうなるの?」

「日菜……! お前か……? お前が二人を……? 俺は……あいつらがいないと……おれは……」

バシッ!!!

「日……菜……?」

「いつまでそんな生き方をしてるつもりなの!!! 目を覚ませ弓神陽葵!!!」

強烈な平手打ち。

それを自らの頬で受けた俺は茫然と立ちすくむ。

「なあ日菜・・・なんでお前は・・・そんなに俺を気にするんだ。なんで俺の生き方を否定する・・・？なんで俺のよりどころを奪うんだ・・・？教えてくれよ・・・」

情けない声で問い詰める俺。それに対し、日菜は何のためらいもなく言い放った。

「キミを助けたいから」

意味が分からないと思った。

しかしその目はいつものお調子者の日菜ではなく、なにか決意めいたものを感じる、力強い目をしていたのであった。

第5話 はつこい

始まりはとても些細なことだった。

「すまんねえ」

「いやいや、困ったときはお互い様ですから」

おじいちゃんの荷物を持って楽しそうに話しながら歩く男の子。
近くの共学校の制服だ。

「ふーん、今時珍しい」

あたしはそれに目を引かれた。

それにその男の子は、世間一般で言う「イケメン」の部類に入るのだろうか。

正直あたしはカッコいいとかそういう感覚がわからないけど。クラスの子たちが読んでる雑誌や休み時間に見ている男性アイドル系の動画。

その整った顔立ちはそれを彷彿させる。

「ありがとうね」

おじいちゃんを笑顔で見送ったその人はそのまま振り向き歩き出す。

・・・しかし男の子にはスマホのながら運転をしながら走ってくる車が近づいていた。男の子のいるところは死角になっているのか気づいていない様子がない。

そして車の運転手さんも男の子のことが見えていない様子だった。

「危ないッ!!!」

あたしはなにも考えずに体が動いていた。

「えっ!?!」

間一髪。飛び込む形になったあたしは男の子もろとも吹っ飛び、そしてその後ろを車が通りすぎていった。

あたしが覆いかぶさる形になり路に倒れこむ。

「大丈夫!？」

「いててて・・・ごめん、助かったよ。しかしあの車・・・逃げやがったね」

「ケガとかなさそうでよかったよ。それとき、キミ。悪いんだけど手をどかしてくれろと嬉しいかな？」

「え？」

「いやー、まだ誰にも触らせたことなかったけどまあ尊い命が救われたし・・・まあいつか!」

「・・・」

?!?!?!?!?!?

男の子は自分の掌があたしの胸を押さえてつけているのに気づき、慌てる。

「あ、そっか、あたしがどかないと手も動かせないよね」

「(ごごごごご)、ごめん!というかなんでそんなに冷静なの!？」

「んー?まあ事故だし。キミが無事ならそれでいいかなって」

これがあたしと陽葵の出会いだったんだ。

その後もちよくちよく友達として遊んだんだけど、すごく楽しかった。

波長は合うしあたしのムチャにも嫌な顔一つせず応えてくれる。男の子の友達がほぼいなかったあたしはそれがとても新鮮だった。

でも時折、陽葵から感じる歪でドロドロとした空気。気のせいかもしれないけどこの意味が分からなくて悩んだりもした。

※

「陽葵くん！いこー！」

「沙綾、はしやぎすぎだよ」

ある日。あたしは見てしまった。

「あれはポピパの沙綾ちゃん？」

陽葵が沙綾ちゃんと手をつないで歩く姿。

「ふーん、あの二人付き合ってるんだ」

別に何とも思わなかった・・・っていえばウソになるのかな。

陽葵は普通にカッコイイんだろうし、沙綾ちゃんもすごくいい子。

普通にお似合いかもしれない。むしろ陽葵をからかうネタが出来てラッキー！くらいにしか思わなかった。

でもその考えが変わったのはまた別の日。

「陽葵さん・・・いきましよう・・・」

「ゆっくりでいいよ、隣子」

陽葵は・・・隣子ちゃんとも手をつないで歩いていた。

俗にいう浮気現場、というやつかもしれない。

陽葵個人の問題のはずなのに。なんだかすごくムカッ！ってしてぜんっぜんるんっ♪ってこなかった。

「なんで……?」

なんでそんなことをするんだろう。考えをぐるーつつてめぐらせても答えは出ない。

そしてそれが決定的になったのはあの日。

つぐみちゃんのお店でお茶した帰り、あたしはやまぶきベーカリーの近くを通った。

「あー！おねーちゃん赤くなってるー！」

「紗南!?これは違って／＼／」

「はっはっは！紗南ちゃんには敵わないな！じゃあ、俺は帰るよ。沙綾、また明日な。紗

南ちゃんもばいばい」

「うん！ばいばい！」

「陽葵くん！ばいばい！」

店先にはいい雰囲気的沙綾ちゃんと陽葵、そしてそこに割り込む沙綾ちゃんの妹ちゃん。
ふたりが別れた後、あたしは陽葵をからかいながらも探るつもりで話をかけるタイミ

1時間もした頃。燐子ちゃんの家から出てくる陽葵の姿を確認し、再び後をつける。この絵面は完全に不審者。もしくはストーカーって思われても仕方ないかも？でも気になるものは仕方ない。

「おええええええええええつ．．．．．」

道をしばらく歩くと陽葵は路傍に嘔吐した。

「もう．．．限界なのかな」

そんなことをつぶやく陽葵。

あたしはさつき見た光景、そして今のその光景を見て考える。

さらに今まで接してきた陽葵の様子、そして漠然と感じていた歪でドロドロとした空気。

「あ．．．そっか．．．」

あたしは答えを見出した気がした。

「陽葵は・・・そういう生き方しかできないんだ」

これは完全な憶測だけど、キミは一人で生きることができないんだね。
そして自分がやっつてることのクズさを自覚して、良心の呵責に苦しんでいるんだ。

※

あたしは次の日、弓神陽葵という人間を知らべた。
調べたっていつても、偶然羽丘に陽葵と同じ中学だった子がいて話を聞いたただけ
ど。

「え？氷川さん弓神君の事知ってるの？」

「まあね」

「あの人はやめておいたほうがいいよ・・・」

「なんで？」

「確かに気づかいはできるしイケメンなんだけど……女癖がすごく悪いの。中学の時も痴情のもつれで女の子に刺されちゃったんだって……」

「なんと」

この話を聞いてあたしは確信した。やっぱり陽葵はそういう生き方しかできない人なんだ。

「そんな生き方してたら……壊れちゃうよ、陽葵……」

間違ってる。弓神陽葵の生き方は間違っている。

それにあたしが見てしまったあの光景。彼は自分の生き方、今の現状に苦しんでいる。

「助けてあげなきゃ……!」

あたしはそう決意した。

イケメンで、外面が最高に良くてあたしと波長が合って。でも深い闇を抱えている。

そんな奴だけど・・・
それでも弓神陽葵は・・・あたしの初恋だから。

第6話 鬼にでもクズにもなろう

「俺を．．．助ける．．．？」

何を言ってるんだこいつは。

助けるどころか俺を追い詰めてるじゃないか。

「くっそおおおおおおお！」

「陽葵！」

俺は日菜に背を向け、走り出し、沙綾と燐子を追う。しかしすでに姿はなかった。

「ハア．．．ハア．．．」

「陽葵！」

「日菜．．．お前なんなんだよ！何の権利があつてこんなことをする．．．！」

激昂。俺は感情のままを日菜にぶつける。

許せない。俺の平穩を壊す者は……誰であろうとユルサナイ

「ならば、キミはこのままでいいの？誰かにもたれかかって、偽りの幸福で塗り固めて、一人になったら苦しむ。そんなの……いつまで続くかわからないじゃん」

「それでも……それでも俺は……！」

「今が良ければそれでいいの？ほんとなんも考えてないんだね」

「ちくしよおおおおおおお！」

女を殴る度胸もない俺は耐えきれなくなって再び走る。とにかく……とにかく沙綾と燐子にあわなきや……！

俺はただひたすら走った。

しかしその日……

沙綾にも燐子にも拒絶され、会うことはかなわなかった。

※

言ってしまった。

ついに言ってしまった。

彼が自分を守るためにずっと被っていた仮面。それを無理やり剥がそうとしてしまった。

「すごく……怒ってたな」

本当にこれでよかったんだろうか？

陽葵が目を覚ますためにはあたしがやったことは絶対に通らないといけない道だったと思う。

『日菜……お前なんなんだよ！何の権利があつてこんなことをする……！』

ほんとその通りだね。なんであたしがこんなことやってるんだろう。あたしの役目じゃないでしょ？

怒る彼に対し、あたしは感情を押し殺して淡々と反撃を行った。

そしてそれをしていっているうちに彼は再び、あたしの前から姿を消してしまったのだ。

「ごめんね」

でも、もう後には引けない。沙綾ちゃんと燐子ちゃん。彼の目を覚まさせるのにはどうしても二人を巻き込まなきゃいけなかった。

そして、それをやってしまった今、あとは突き進むしかない。

たとえ陽葵がどれだけ悲しみ、他人が悲しい思いをするとしても。その先にある深淵のような悲しみに包まれるよりはいい。

彼を救うためなら私は鬼になろう。そして……

「クズにでもなるよ」

そう、ひそかに決意したのであった。

※

「あら、陽葵君」

「あ、どうも」

店先から出てきたのは沙綾のお母さん。

「今日はバイト休みよね？」

「ええ。でも沙綾さんに用事があって」

そう、昨日話すことが叶わなかった沙綾。

一刻も早く誤解を解きたくていつも沙綾が店先にたつ時間になるとすぐにここに来た。

“誤解”……？

誤解とはなんだ？なにが誤解なんだ……？

「陽葵君？」

「あ、すみません」

ドロドロとした自問自答が始まりかけたところで、沙綾のお母さんの声で現実呼び戻される俺。

「ごめんなさいね〜沙綾は今日バンドの練習で遅くなるって言ってたわ」
「そうなんですか」

この辺のバンド練習・・・ライブハウスだとC i R C L Eかな。

「わかりました、行ってみます」

沙綾のお母さんに頭を下げ、俺はC i R C L Eの方へ向かう。
すると到着する前に見覚えのある顔が見えた。

「沙綾!」

「・・・!陽葵くん・・・?」

俺の顔をみて固まる沙綾。

「沙綾、話を聞いてくれ……！」

「陽葵くん……！私は……！」

沙綾は複雑そうではあるが少し緩んだ顔でこちらを見た。

よし、これなら〃いけそうだ〃

そんな邪な考えが浮かび、近づこうこした俺。

「おい、てめーが沙綾のカレシか？」

「え？」

沙綾の横から発せられる声。

「あ、有咲……！」

その有咲と呼ばれたツインテールの少女はキレた表情で俺を睨んできたのであった。

この感じ、おそらく昨日のことを沙綾に相談を受けたのかもしれない。

「てめーが沙綾にやったこと、ぜってー許さねえからな！」

はい、的中。

この有咲と呼ばれる少女の怒りを目の当たりにした俺は、一筋縄に行かないという予感を感じていたのであった。

第7話 喪失

「てめー、自分が何をやったかわかってんのか!？」

有咲さんとやらは頭にツノが生えているのかと錯覚するくらいブチ切れていた。

「そのことで誤解を解こうと思って・・・沙綾、今少し時間いいかな？」

「彼女の前で違う女とキスをしてなにが誤解だツ！私の友達を都合のいい女扱いするんじゃないー！」

取り付く島もない。そんなこの子に対し、俺は徐々に・・・
苛立ちを感じ始めていた。

「キミには言っていない」

「・・・ツ！」

淡々と、同じトーンで、そう言い放つ。

「これは俺と沙綾の個人的な問題だ。相談を受けたかもしれないけど、結局は当事者二人で話して解決すべき問題。第三者のキミはお呼びじゃないんだよ」

「そ、それは……」

感情を押し殺し、そのままのトーンで言うとは咲さんとやらは黙ってしまった。

所詮こんなものだ。この程度で黙るなら最初から介入なんてしないでいただきたいね。

「沙綾。他人は放っておいて二人の話をしよ？」

そして打って変わって、甘やかすような、いつも優しい弓神陽葵の声で沙綾に語り掛ける。

このまま関係を戻して、ひとまず心を落ち着かせたい。

よりどころが欲しい。はやく……はやく……沙綾……

「他人・・・?」

しかしその反応は俺の望むものではなかった。

「他人じゃない・・・有咲は・・・友達だよッ!」

「・・・!」

突然響く大きな声。

こんな沙綾、未だかつてみたことがない俺はたじろいでいた。

「こんな私を心配して、関係ないはずなのに私のために言ってくれて。陽葵くんにとっては他人かもしれない。でも私にとってはそうじゃない・・・!有咲は大事な友達。有咲のことをそんなふうにするなんて・・・陽葵くんでも許さないッ!」

“許さない”

前後の言葉はどうでもいい。俺にはこの言葉が心臓を貫く衝撃となり、骨が軋むよう

な感覚が全身を襲ったのだ。

「有咲……ごめんね。こんな人だったなんて……見抜けなかった私がバカだった」

「さ、沙綾、それは言葉のアヤで……!」

「言葉の綾……?でも心の中ではそう思ってるってことでしょ?」

「そ、そんなことは……」

「もういいよ。有咲、いこっか」

「お、おう……」

沙綾は有咲さんの手を引き、なんのためらいもなく俺の横を通り過ぎる。

「さ、沙綾……待ってくれ……沙綾、俺は……お前がないと」

ふらふらとした足取りで後を追おうとする。

すると沙綾がゆっくり振り向き、そして言い放った。

「さようなら、陽葵くん」

その顔は笑顔で、そして目からは一筋の涙が流れていたのであった。
この日俺は・・・山吹沙綾という支柱を失った。

※

足取りが覚束ない。

俺はさつきまで何をしていたんだ。

雨が降っている。かなり強い雨だ。しかし俺はそれに寒さも、煩わしさも感じることなく、ずぶ濡れのままフラフラと歩いている。

「陽葵さん・・・？」

名前を呼ばれた気がした。

「燐子・・・？」

「陽葵さん！何してるんですか・・・！こんな、ずぶ濡れになって・・・！」

「燐子……燐子……！」

俺は何も考えず燐子の胸に飛び込んでしまった。

その後、燐子の家に通される俺。

「今は誰もいませんから……お風呂……使ってください」

浴室の通される。

俺の服はその間に燐子が乾燥機にかけてくれているようだ。

「お風呂、ありがとう」

「い、いえ……」

その後、沈黙。

俺も、燐子も一言も発さず何分経っただろうか。先に口を開いたのは俺だった。

「燐子……俺は……俺はっ！」

そう言いかけた瞬間、俺の体は暖かなぬくもりに包まれた。

そう、燐子が後ろから抱きしめてくれているのだ。

「大丈夫ですよ陽葵さん．．．色々．．．都合があるんですよね．．．？」

「燐子．．．」

「わ、私はこうやって一緒にいられるだけで幸せですから．．．元気、出してください．．．」
「燐子！」

そう聞いた瞬間俺は力いっぱい燐子を抱きしめる。

「ありがとう．．．ありがとう．．．！」

「陽葵さん．．．好きです．．．」

“好き”なんて薄っぺらい言葉。

それが俺の自論だったがこれほど好きという言葉が安心をもたらす瞬間が今まであっただろうか。

そのあと、時間も遅いし親もそろそろ帰ってくるとのことだったので、名残惜しいが白金家を後にした。しかし気分は最高だった。

※

あれから数日、俺は燐子の家に向かっていた。

今日は部屋で一日ゆっくりするつもりだ。今日は親御さんもいるということで土産のケーキも持ってきた。

ピンポーン

「はい」

「燐子さんの友人の弓神と申します」

「……………」

あれ……………？返答が帰ってこない。

「燐子にはお会いになれません」

「……ッ! どういう……ことでしょう」

「少々お待ちください」

そういつてインターホンの通信が切れる。すると、玄関のドアが開き中から燐子のお母さんの思しき女性が出てきた。

そして歩み寄り、俺が立っている門扉の前までやってきた。

「あなたが弓神陽葵さんですか？」

「はい、お初にお目にかかります」

「……そうですか。私は燐子の母です」

はあ……と深く息を吐く燐子のお母さん

「あなたが燐子にやったことは聞きました」

「え……?」

「正直に申しましょう、金輪際燐子に近づかないでください」

その言葉は俺を絶望への入り口へ誘う、鋭いナイフのような言葉であった。

「し、しかし……！それは当事者間で解決してて……！」

「それだけではないでしょう？あなたのことは調べさせていただきました」

背筋が凍った。なんで……なんでこの人が俺の過去を……

「中学生にして女性関係で刃傷沙汰。とてもじゃないけどそんな男性に燐子は任せられません」

そういう燐子のお母さん。

そしてその後ろ……玄関扉からは燐子がこちらの様子をうかがっていた。

「燐子……！！！！」

「陽葵さん……ごめん……なさい……！！」

燐子はそれだけ言って、そのまま家の中に姿を消してしまった。

「あつ・・・あつ・・・」

「話は以上です。もしこれ以上ここに居座るおつもりでしたら警察を呼びます。話は以上です。では、失礼します」

無慈悲に言い渡される宣告。

俺はただ・・・黙ってそれを聞くしかなかった。

こうして俺は白金燐子という支柱までも失ってしまった。

これで俺を支えるモノはない。

あるのは俺という不安定な・・・メトロノームの針のようにブレる俺本体だけであった。

そして立ち去った白金家

その道中には・・・潰れたケーキが入った箱が落ちていた。

第8話 謝罪

俺は何をやっているんだろう。

俺はすべてを失った。沙綾。燐子。俺を支える、もたれかかることのできる壁はもう存在しない。

自暴自棄。今の俺にこれ以上似合う言葉はないだろう。

荒れに荒れた俺はこんな夜の街を歩いていた。

「でさーwwww」

「きやはは！すごいね」

ドンッ

なんだ・・・？

なにかにぶつかった・・・？

「オイテメー！ 氣イ付けろや！」

「……………」

「オイテメエ聞いてんのか！ 人にぶつかっておいてなにもねーのかよ？」

なにかきこえる。

怒号だ。 そうだ、これは怒号だ。

「ちよつとやめなつてーwww そのイケメンくん、きつとアンタが怖くてビビってるんだよーwww」

「ひやははwww まーまー俺は優しいからよおー……あやまりや許してやるよ」

あやまる……………？

だれが……………？ だれに……………？

「オイ……………聞いてんのか！ 許さねえぞ？」

「ゆる……………さない……………？」

“許さない”

それは俺のトラウマを呼び起こす禁断の言葉。

「許さない……？それは俺に向かって言ってるのか……？」

「ああん!?なんだテメエ偉そうに」

「それは俺に向かって聞いてんのかって……聞いてんだろがよオオオオオ！」

ドゴツ！

「グハツ……!?」

「きゃああああああああああああああ」

俺は容赦のない一撃を“ソレ”に向かって放つ。

「なんで許してくれないなんで拒絶する……なんで……なんで……なんで……なんで」

バキッ！ドガッ！

「グオ・・・ガハア！」

俺はひたすら拳を振るい続ける。

「許してくれ許してくれ許してくれ・・・」

ドゴツ！ゴスツ！

そして俺の言葉はやがて謝罪に変わる。

何に対して許しを請うているんだろうか。

「・・・ゴフツ」

「もうやめてええええええええええその人死んじゃう！」

聞こえない。 “許す” 以外の言葉は聞きたくない。

「オイ！お前何をやっている!？」

しかしそこで放たれる鋭い言葉。

その言葉でふと我に返った俺は目の前に広がる光景をようやく認知したのだ。

血まみれになってぐったりしている男。その男にすがり泣きわめく女。

そして俺に鋭い怒号を上げた一人の警官。

「あ．．．．ああああ．．．」

「あ、オイ待て！」

俺は逃げた。全力で逃げた。

週末だけ会って夜の街はかなりにぎわっており、比較的簡単に警官を撒くことができた。

後ろ姿しかみられていないし多分、大丈夫だろう。

俺はそのまま逃げ切り、そして自宅に帰ったあと――

そのまま部屋から出ることはなくなつた。

※

あれから沙綾ちゃんと燐子ちゃんが陽葵と別れたことを聞いた。

ごめんね。二人とも。本来、あたしが介入していいことじゃなかったと思う。

でも陽葵をまともにするためには、どうしても通らなきやいけなかったことなんだ。ちなみにあれから陽葵とは連絡を取っていない。

やっぱり顔を合わせづらいのだ。でもここまで進んだ以上後戻りはできない。このままではいけないと思う。

「え？来てないの?？」

「うん・・・しばらく休むって連絡はあったらしんだけど、もう1週間になるって」

でもどうしても陽葵の動向が気になったあたしは、陽葵と同じ高校に通う中学校の頃の友達にどうしているかを聞いてみた。

しかし帰ってきた答えがこうだ。

「1週間・・・ちょうど沙綾ちゃんたちと別れた時期だよね」

どうしても気になり、ソワソワ落ち着かなくなったあたしは決心して一人暮らしをする陽葵の家に向かった。

ピンポーン

「・・・・・・・・」

しかし反応はない。うーん、インターホンくらいじゃでないっていう意思表示かなあ・・・・・・・・

ガチャツ

「あれ・・・？あいてる？」

なんと玄関のドアが開いていた。

さすがに不用心過ぎないかな・・・？
でもやっぱり心配だ。あたしは勇気を出し、そのまま足を踏み入れた。

「陽葵！入るよ！」

しかし返事はない。

「陽葵・・・？」

部屋に入りあたしが見たもの。

それは・・・

「陽葵!!!!」

大量のカップ麺のゴミが詰まったゴミ袋が乱雑に置かれ、空になったペットボトルが散乱する部屋の中に横たわる陽葵であった。

第9話 あたしの全力（物理）

「陽葵!!」

あたしは横たわる陽葵に駆け寄る。

「……」スースー

よかった……寝てるだけだ。

この惨状も、カップめんの容器はちゃんと洗っているようで悪臭があつたりとかはない。

「陽葵。起きてよ」

「んだよ……」

うつすらと目を開ける陽葵。

「日菜か・・・何しに来た」

「別に。ちよつと様子を見に來ただけだよ」

陽葵の前ではこの口調・態度は崩さない。

あたしは冷酷で、辛辣で、スパルタであり続けなければならない。
この人に甘い顔をみせてはいけない。

「落ちぶれたね」

「・・・ツツ!!!」

ガタツつと突然立ち上がる陽葵。

「誰のせいだと思っているツ」

!!!!!!!

全力で怒鳴る陽葵。一瞬たじろくも、すぐに表情を無に変える。

そう、これはあたしのせい。

「それは自分のせいでしょう？キミが不誠実を働き、収まるところに収まった。ただそれだけ」

「どの口が……いうんだあ!!!」

刹那、陽葵はあたしに拳を向ける。

その動作を察知したあたしはこれくらいは受けようかな……って思ってしまった。目を瞑り、拳が到達するのを待つ」

「……!」

しかし、待てども待てども衝撃はこない。

恐る恐るを目を開けてみると拳を握ったままプルプルと震えだし、膝をつく陽葵の姿があった。

「お前を殴るなんてできるかよ……」

涙をボロボロこぼしながらそうつぶやく陽葵。

そんな姿をみてギョツと抱きしめたくなる衝動に駆られるが、必死にそれを抑え込む。

「お前の言うとおりだ」

「え？」

ふと我に返ったのか、陽葵は突然語りだした。

「お前が言う通りなんだ。俺は、一人では生きていけない。いけないこととわかりつつもたくさんの人にすがってきた。しかも彼女としてではなく、もたれる壁というひどい扱いでな」

これは……！陽葵が本音で話し始めている。

「でも変えられない。俺はそういう生き物なんだ。刺されても、見放されても変われない。もうムダなんだよ。諦めてるんだよ。何度繰り返しても同じ。結果は変わらない」

「今までさ。今みたいに誰かに頼ったりしたことあるの？」

「ない。しても無駄無駄。意味なんてない。どうせこれからもそうだし、変えることなんてできないんだよ。もういいだろ！帰れよ!!!」

もう世の中なんてどうでもいい。そんな表情で吐き捨てる陽葵をみたあたしは。ものすつごくイライラして、そしてぐわあー！って。ある感情が出てきた。そしてその感情は顕現する。

「いつまでそうやってウジウジウジウジしている気なんだ弓神陽葵ツ!!!」

ドゴツ!!!

あたしの全力の拳は。

全力で放った感情は、陽葵の顔面を貫き、吹き飛ばした。

「ひ、ひな……」

「何が変わらないだ！キミが変わるために何をした!? なにもしてないでしょ!? 刺された

ときに何を思ったの!?!見放されたときに何を思ったの!?!」

あたしは止まらない。腑抜けとなった陽葵をただひたすら本気で。

胸ぐらをつかみ、拳をぶつけ、そして声もぶつける。

「そうやって仮面被るのも限界なんですよ?キミの良心が悲鳴を上げてるんですよ?なんでそれを素直に受け止めないの?それですべてキミが壊れたら?意味ないじゃん!!!」

「そ………」

顔を晴らした陽葵は何かを言いかける。

「そのときは、そのときだ。お前には関係ない」

「まだ……そんなことをいうかあああああああああああ!!!」

ほんとはこんなことしたくないのに。

でもあたしは誓った。彼を変えられるなら鬼にだってクズにだってなるって。

その決意を簡単に揺るがしてはいけない。彼が本気で、自分を変えたいって思えるまでは。

一通りやり取りが終わり、二人ともその場にへたり込む。

陽葵は顔を腫らし、痣のできた顔で。

あたしは表面上は何ともないけど。冷静になった今はヒリヒリと痛む拳と心をなでながら、陽葵が口を開くのを待ったのだった。

第10話 デモデモダツテ

「……俺は生きてる価値なんてないのか……？」

人格を完全否定するあたしの言葉は、陽葵の心臓を貫き、握り潰し、そして骨まで碎くかの勢いで伝わったようだ。

「なにをバカなこといつてんの？」

「じゃあ俺はどうればいいんだよ……！」

「どうしたらいい、じゃないんだよ。どうしたいか、でしょ」

あくまで立ち振る舞いを変えないあたし。

さつきより冷静になつているあたしは陽葵の言葉一つ一つに淡々と返事を返すだけだ。

「でも俺は……！一人じゃ何もできない……！」

「一人じゃ何もできないなら誰かに頼ればいい。今までみたいにもたれるんじゃないやなくて自分の生き方を変えられるようにね」

「でも……もう俺の周りには誰もいない……」

「でもでもでももうさいつツ！言い訳をしないと死ぬ体なの!」

デモデモダツテを繰り返す態度にイラついてしまい、再び大きな声を出しちゃった。いけないいけない、冷静にならなきゃ。

「……もしさ。そんな誰かがいたら本気で自分を変えたいっておもおう?」

次に放つのは選別の一言。このあとの陽葵の言葉次第で、あたしの考えは分岐する。

「……まで情けない姿をみられたんだ……お前にはいうよ。確かに俺の心は俺の生き方を否定している。脳が右手を動かせと言っているのに左手を動かす。脳が寝ろといっているのに無理やり目をひん剥く。ずっとそんな感覚が続いているんだ」

そこから今までの心情を語る陽葵。限界を感じつつあったこと。でもそれをやめる

と自分自身を否定することになり、やめられなかったこと。あたしが見た沙綾ちゃんと別れた後のブロック塀殴打のことや燐子ちゃんと別れた後に嘔吐したこともすべて打ち明けてきた。

「俺は・・・誰かを傷つけ自分だけがいい思いをする偽りの幸せなんて・・・もう求めてないんだ。わかってたはずなのに・・・お前にここまでされるまで認められなかった」

話し切った陽葵はゆっくりという。

「俺一人じゃ変わらない。でも・・・もし、こんな俺でも助けしてくれる人が・・・頼れる人がいるなら、それにかけてみたい。結局人頼みになつてて情けねえ話だけど」

それはようやく出た本音。

弓神陽葵の心の底からの声だった。

「そつか。そう思えただけで前進だと思おうよ」

「日菜のおかげかもな・・・なあ日菜、一つ聞いてもいいか？」

「なに？」

「なんで俺は俺を助けようなんて思ったんだ？しかもここまでのことをして。こんな本性知ったら離れていくのが普通だと思うんだけど」

運命の一言。

自分を変えたいと決意した陽葵にさつきまでの極端な辛辣な態度はもういらぬかもしれない。

あたしは態度を軟化させ、話を続ける。

「うーん。理由はあるんだけど今の陽葵には教えない！」

「なんだよそれ」

「そーいうもんだよ！」

「言いたくないなら仕方ないか・・・でき、日菜。お前にここまで頼むのはどうかと思うんだけど、お願いがある」

「なにかな？」

改まった態度を見せる陽葵。今までのビクビクして虚ろな目をした弓神陽葵ではな

く、スツキリした目で。

「さつき言つてた俺を助ける人・・・お前がなつてくれないか？」

「愚問。今さらでしょ。ここまで来たら最後まで付き合おうよ」

かなり遠回りしちやつたけどつい到这里まで来た。

この日、弓神陽葵は変わる決意を固め、あたしは最後までこの人を支える。
そんな決意を固めたのであった。

第11話 笑顔の別れ

「まあそんなネガティブなことを言う！もとシャキツとキリつとるん♪ってしな
きゃ！」

「相変わらずわかんないよ日菜のそれ!？」

陽葵とあたしがそれぞれ決意を固めてから数か月。

あたしは陽葵のネガティブな部分を時には辛辣に、時には優しく、そして徹底的に指
摘していた。

あれから陽葵もだいぶ意識が改善されたように思える。

まず、今までやって来た“他人にもたれる”ということがなくなってきた。

まあでも、ところどころ甘ったれたことを言っであたしにもたれようとするときがあ
るからその都度対応するんだけどね！

「とにかく、ちゃんとケジメをつけるって決めたんだから。今さら怖気ついてどうすん
のさ?？」

「それはそうだけど・・・やっぱ心の準備が・・・」

「あーもう！陽葵のそういうところ全然るんつってこないよ！たまには自信満々にしゃべってあたしをビビッとシビレさせることくらいしなよ！」

「む、無茶をいうな・・・」

「そこ！その自信のなさがダメ！」

「ひ、日菜さんスパルタすぎやしない・・・？」

そう、今日のかつて陽葵が“壁”にして傷つけた沙綾ちゃんと燐子ちゃん。

彼女たちにしつかりと謝りに行くって決めた日だ。すでに二人は呼び出してある。

「もう後には戻れないよ？しつかり話して、ちゃんと次に進もう？」

「そ、そうだね・・・」

「・・・やっぱさ。あたしもいこうか？」

仕方なかったとはいえこうなる原因を作ったのはあたしで結果的に二人に悪いことをしてしまった。あたしも謝るべきだって陽葵に言ったんだけど・・・

『いや・・・お前をそうさせてしまったのは俺だし、俺一人で行くよ』

そんな返答が帰ってきたため、引っ込むことにしたのだ。

「土壇場で情けないこと言ってごめん。いこうか」

そして決戦の時が来た。

※

「沙綾、燐子・・・」

「陽葵くん・・・久しぶりだね」

「ど、どうも・・・」

『直前でチキンを起こすかもしれないから俺がちゃんと話し始めるまで見張っててくれないか?』

そんな情けないことをお願いされていたので、仕方なく物陰から様子をみるあたし。

「二人とも元気してたか？」

「うん。程々にね。陽葵くんは？」

「俺もまあまああってところだ」

「そっか」

「「……………」」

うーん、黙り込んでしまった。

みんなすごく緊張しているのが分かる。

「あの、沙綾、燐子」

「……………！な、なになな」

「なんでしよう……………？」

「沙綾と燐子に言いたいことがある」

陽葵は意を決したように顔を上げ口を開いた。

「いままで・・・ほんとうにごめんなさい。謝っても謝っても許してもらえないことじゃないと思う。自己満足かもしれないけど。でも、ちゃんと言葉にして言いたかった」

頭を深く下げ謝罪する陽葵。その声は今までのような自分を偽った声じゃなかった。そして始まる陽葵の告白。なんでこんなことをしたのか。それを二人にちゃんと告げはじめた。

「さて、あたしはそろそろ退散かな」

陽葵はチキらずちゃんと話を始めることができたようだ。

あたしが話に入れない以上、この後は3人の問題。

間接的にかかわったとはいえ、存在が認知されていないあたしはこの話を聞くべきじゃない。

あとは陽葵が何とかするべきだ。

そう思ったあたしはその場を後にし、ちよつと離れたところで陽葵を待つことにし

た。

．．．．．

「白菜！」

そしてしばらくして．．．晴れた顔をした陽葵が戻ってきたのであった。

「何その顔（笑）」

腫れるとともに腫れた顔をしていた。でもその表情は憑き物が落ちたかのような、すごくいい表情だった。

※

「陽葵くんはなんで変わろうと思ったの？」

告白をして、腹を割って話して．．．一区切りついたところに沙綾にそう聞かれた俺。俺

はためらいなく、事実を伝える。

「こんな俺でも真剣に叱ってくれて、向き合ってくれた人がいたんだ」

「・・・なるほどね。うん！なんかすつきりした！」

「わ、私もです・・・正直まだ消化しきれてない部分がありますけど・・・わけを知ることができてよかったなって・・・」

腹を割って話すことができたせいも、二人には笑顔がもどっていた。

「ねえ陽葵くん。私はやつぱり、陽葵くんを許すことはできない」

「・・・ッ！」

しかしその笑顔とは裏腹に沙綾から放たれた一言は俺の胸を貫いた。

「やつぱ・・・そうだよな・・・俺がやったことは・・・」

「あつ！そんな暗い顔しないで！」

「え・・・？」

沙綾は最高の笑顔だった。

「燐子さんは？」

「え．．．？」

「燐子さんはどうします？」

「わ、わたしは．．．．」

そして今度は燐子も俺の方に歩み寄る。

「山吹さんと．．．同じでいいです」

それは死刑執行のようなものだった。

「えっ．．．ちよ、燐子．．．？その．．．」

「陽葵さん．．．ごめんなさい．．．!!」

燐子は静かに手を振り上げたかと思うと・・・

沙綾と並ぶくらいの大きな力を奮った。

バシシシシシシシ
!!!!

「ぬおおおおおお!!」

「あはは、燐子さんもなかなかやるね」

沙綾も燐子も笑顔だ。

そしてこんな強烈な痛みを顔面に炸裂させられた俺も笑顔になっていた。

「じゃあね、陽葵くん。最後は・・・笑顔でお別れできてよかった」

「陽葵さん・・・お付き合いは終わってしまいました・・・また困ったことがあれば・・・
いつて下さいね」

「二人とも・・・ありがとう!!!」

「これは心の底からの本音。」

バイトもやめてしまったし沙綾とはよほどのことがない限り会うことはないだろう。燐子もああは言ってくれるが同様だ。

これからはちゃんと生きていく。その決意が確かに胸にあるから。

「あ、そうだ陽葵くん」

「なに？」

「その陽葵くんを変えてくれた人。その人の事・・・真剣に考えるんだよ」

「なっ!？」

「ふふっ、それだけ。ばいばい」

「そうですね・・・私、陰ながら応援してますから・・・！さようなら・・・！」

そんな感じで沙綾は、最後に俺の心の中に爆弾を放り込んで未練のない後ろ姿を見せながら去っていったのだった。

第12話 甘いキス

「やっと・・・見つけた」

一人たたずむ少女。何かを果たし自由を手に入れた少女の目は輝いていた。

「うん、今行くよ。陽葵」

そしてその輝きは暗い輝き。闇が光るといふ矛盾した目をした彼女はつぶやく。

「あなたを幸せに・・・る・・・も・・・い・・・に」

彼女は光るそれを手につぶやいた。

※

「なーんか最近陽葵がおかしい」

いやおかしいっていうのは語弊があるかもしれない。

正確には“おかしくない”

おかしくなくておかしい。何を言っているのかわからないと思うけどそんな感じ。沙綾ちゃんと燐子ちゃんの一件が解決した日からこの違和感は続いている。

「二人とどんなやりとりがあつたんだろ」

そう、あの日から陽葵は人が変わったみたいだに普通になっている。

時々見せていたあたしへの依存はほぼない。

つまり“普通”になってしまった”

“普通じゃない”のが普通だったのに。

あー！自分でいってて意味わかんなくなってきた！

「モヤモヤするうー！でも聞かないって決めたし・・・あああああああ！」

「日菜！うるさいわよッ！」

「あ、ごめんおねーちゃん」

そういつて部屋に入ってきたのはおねーちゃん。

ヤバ、夜にちよつと大声出しすぎたかな？

「何をそんなに悶えているのかしら？」

「うーん、ちよつとね」

「ちよつとじゃわからないわ」

「・・・ねえおねーちゃん、聞いてもいい？」

あたしはおねーちゃんにちよつとした質問を投げかけることにした。

「えつとね、悪いことばつかしてた人が迷惑をかけた人に謝りに行きました。すると人が変わったみたいに悪いことをしなくなりました。なんででしょう？」

「・・・なにかのクイズかしら？ そうね・・・考えられるのはふたつ。一つは見せかけだけ取り繕って反省してますとだけ言ってるクズ野郎」

「口が悪いよおねーちゃん!？」

ポロツつと怖いことをいうおねーちゃんに思わずツツコミを入れる。

「おつと私としたことが」

「それでもう一つは……?」

「そうね……その謝罪のやり取りでその人の意識を変えるほどの会話があったってことかしら?」

「やっぱそーだよねー……」

「参考にならなかったかしら?」

「ううん、ありがとうおねーちゃん」

おねーちゃんは部屋を出ていく。

うーん……モヤモヤするけど考えても仕方ない!寝るか!」

p r r r r

「つと……」

そこでスマホが光る。

・・・！陽葵からのメツセージだ！

『今度の日曜日、遊びにいかないか？二人で』

今度の日曜。それは――

「あたしの誕生日だ」

あたしは、それにたいして“OK”と即答した。
でもあたしはこの時はまだ知らなかった。

この日がすべてを。

すべてを変えてしまう日になってしまっただなんて。
あたしは後に後悔する。

この日は・・・行くべきでなかったんだと。

すべてが終わってから、後悔したんだ。

※

「お待たせ、陽葵」

「別に待つてないさ。俺も今来たところだ」

「うんうん、デートの待ち合わせテンプレとしてはまあまあだね」

待ち合わせ10分前に合流するあたしたち。

「んじゃ、移動しよっか！」

電車に乗って目的地に向かう。

今日は前回のリベンジ……ってわけじゃないけど前回とは違う水族館に来ていた。

この前とはまた違った感じの水のゲート。ドーム型の水槽にしなやかな水流。

その中を自由気ままに泳ぐ魚たち。

それに歓迎されたあたしたちは笑顔だ。

「なあ日菜……手、つないでいいか？」

あれ、陽葵からそんなこと言うてくるなんて珍しい。

ふと顔を見ると陽葵は顔を背けながらそんなことを聞いたのが分かり、ちよつと陽葵が可愛くなつた。

「しよーがないにゃー」

なんておどけて見せるけど心の中らるるんっ！つてしてた。

その後、手をつなぎながら見て回る。

いろんな種類の魚、番いでじやれるコツメカワウソ。

「おおおおおすいー！」

そしてやっぱり最後はイルカシヨー。

盛大な音楽と季節の衣装に身を包んだ女性トレーナー、そして観客にかかるほどの壮大な水しぶきを上げるイルカたち。

盛り上がるには十分だった。あたしたちは今まで見たことのないパフォーマンスに圧倒されたのだった。

「いやーこの水族館はアタリだったね！」

「ああ。まさかイルカでサーフィンするとは……」

各々感想を言いながら駄弁るあたしたち。

そして手は繋がれたままだ。やがて海沿いの公園に到着し、ベンチに腰掛ける。

「あつ……この辺……」

「お、おう……」

陽葵も気が付いたみたいだ。

そう、このあたりはカッブルがいちやつくスポットと化していたんだ。

周りをどれだけみても男女のペアしか座っていない。

「移動する？」

「そうだな……いや。実は日菜……聞いてほしいことがある」

「……? なにかな?」

陽葵が聞いてほしいこと？
なんだろ。

「俺さ……この前、沙綾や燐子に謝ったとき。言われたんだ」

「……！これは！あたしがすごく気になった話！

まさか陽葵の方からしてくれるなんて！

「変えてくれた人の事、真剣に考えろって。その時はなんか突き刺さる言葉だなーって漠然と考えてたんだけどさ。後になってその言葉の意味を考えて理解したんだ」

「……つまりどういうこと？」

「えつと……それはだな……ええつと……」

陽葵は言い淀んでる。まっつて、変えてくれた人って……あたし？

「だから……その。こんな俺なのに真剣にぶつかってきてくれて、変えてくれて……日菜、ありがとう。日菜のおかげで今の、そしてこれからの俺がある。あの日二人と話

して、日菜のためにも本気で、甘えることなく変わらなきやつて思えたんだ」
「……!」

ただひたすら。びっくりした。そっか、最近の陽葵がおかしかった……っていうか普通になつたのはやっぱあの二人のおかげだったんだね。

「ううん。あたしは手伝っただけ。ちゃんと変わったのは陽葵の力だよ」
「ははは……買いかぶりすぎだよ」

照れ臭そうに笑う陽葵。

「それでな……日菜。もう一つ言いたいことがある」
「え?まだあるの?」

「あ、ああ。日菜……俺……俺は」

あれえ?この雰囲気つてもしかして……

「俺は日菜のことが・・・好きだ。今までのクズの俺としてではなく、純粹に女性として。氷川日菜のことが大好きだ」

とつさのことで言葉が出なくなってしまうた。

でも確かにあたしの心臓は鼓動が高まり、ドキドキしている。

「・・・・・・・・えーつと」

しばらく沈黙が続き徐々に不安そうな顔に変わっていく陽葵。

それを見てあたしはさすがになにか喋らなきやって思つて口を開いた。

「陽葵さ・・・・・・・・前に聞いたよね？なんで俺を助けるのかつて」

「あ、ああ」

「それがね。答えなんだ」

「どういうことだ？」

あたしは深呼吸して、そして言い放つ。

今まだ押し殺してきた想いをすべて、素直に。

「あたしも陽葵のことが好きだから」

ついに言ってしまったその一言。

もう、いいよね？陽葵はもう大丈夫。彼を矯正するための厳しいあたしはもういらな
いはず。

そう考えたあたし。そして、あたしたちはベンチで見つめあい、徐々に顔を近づけ：
唇を重ねた。

あの日の観覧車のような苦いキスではなく・・・うれし涙が混じったちよつぱりしよつ
ぱい、甘いキスをしたんだ。

※

「あ、日菜に渡したいものがあるんだ」

「んー？なにになに？」

手をつなぐどころか腕に抱き着きながら歩くあたし。

陽葵がそう言ったところで、今日があたしの誕生日であることを思い出した。色々ありすぎて忘れちゃったよ、反省！

「あ……っ」

「んー???もしかして陽葵???」

「ごめん……家に忘れた」

「やっぱり!もうくおっちょこちよいさん!」

肝心なところで抜けてるなあ

これが陽葵の本質、なのかもね。それともあたしに告白することで頭がいつぱいだつたのかな?

「よーし!じゃあ今から陽葵の家に行っちゃおう!」

「え!?!今から来るの!?!」

「なにー?ダメなのー???彼女に見られたくないものでもあるんだー」

「そ、そういうわけじゃないけど」

「よしっ！じゃあ決まり！」

嬉しくなつて陽葵から離れ、陽葵の方を向きながら後ろ歩きするあたし。

「おいおい、前を向かないと危ないぞ」

「へーきへーき！ほら、陽葵も早く早く！」

「わかつたよ・・・!?!」

幸せな時間。

そのはずだったのに。

「日菜ああああああ！」

「え!?!」

「あなたを幸せにするものを奪いにきた」

後ろから聞こえる女の子の声。

そして突然駆け寄ってきた彼に突き飛ばされ、しりもちをつく。

「なんで・・・お前が・・・」

そういつて膝から崩れる陽葵。

そして倒れた陽葵を中心に深紅の海が広がりをを見せてて・・・

その女子の手には真っ赤に染まり、銀色交じりに光る刃物が握られていた。

第13話 偽りの幸せとクズの結末 I

あたしは・・・なにをやってるんだろ。

鼻をすする声、嗚咽。

そして嗅覚を刺激する甘さが混じった匂い。

色々なモノが混じりあつてこの空間は出来上がっていた。

「なんで・・・？陽葵くん・・・！」

「いやです・・・いやです・・・！目を開けてください・・・！」

沙綾ちゃんも燐子ちゃんも泣いている。でも、あたしは涙一つ流れてこない。

「昔付き合ってた女の子に刺されたんですって」

「でもその子、今は檻のついた病院にいるって・・・」

「逃げ出したらしいわよ・・・」

「そんなことはどうでもいいッ！おとなしくして!!!」

「離せええええこの女あああああああ！殺す！殺してやるうううう!!!」

すると周りで見ていた人たちも取り押さえるのに協力してくれて、あたしはすぐに彼のもとに駆け寄った。

「陽葵!!しっかりして!!!」

彼は血が出るお腹を押さえてぐったりしている。

「因果……かな」

「え……?」

「あいつ……昔俺を刺したヤツなんだ……」

明かされる事実。

「そんな・・・なんで今頃・・・!?」

「恨みに有効期限なんてない。今まで俺がやってきたことを考えると・・・俺はこんな風に報いを受けるのは仕方ないこと・・・なのかも・・・」

「そんなことない!どんなワケがあろうと人が人を刺していい理由にはならないよ!ねえ陽葵、しつかり!気を確かに持って!」

あたしは上着を脱ぎ、陽葵の傷口に押し当て、圧迫する。

「おねがい・・・!とまって・・・とまってええええええええええ!」

「そんなことしたら上着が汚れちゃうよ・・・?」

「そんなことはどうでもいい!」

いけない、陽葵の声がどんどん弱弱しくなっている・・・

「なあ日菜・・・」

「なに?」

「あいつのことは・・・恨まないでやってくれ。今までのツケが回ってきたってだけの話

なんだ。あいつをあんな風にしたのは俺、なんだから……」
「わかった！わかったからしつかりして!!」

陽葵の力がどんどん抜けていく。

なんで？なんでこれが最後みたいな言い方をするの？

「でもな、日菜。人に迷惑ばっかけて傷つけて……助けられてばっかでいた俺が……最後に誰かを……日菜を助けることができたんだ……よかった……つておも……う……よ……」

「最後だなんていうなバカ!!!」

陽葵からついに出てしまった「最後」という言葉。

それに対しとにかく否定したくて、とにかく大声で、はつきりとあたしは叫ぶ。

「ははは……日菜でも動揺するんだな……てかお前が刺されそうになったのも俺が原因だから偉そうなこといえないや……」

「弱気にならないで！どうしよう……血が……血が止まらないよ……」

それだけ圧迫しても流れ出る血はあたしの上着を朱く染め上げる。

「でもやっぱ・・・死ぬのは怖いや・・・せっかく・・・日菜と・・・ちゃんと付き合えるように・・・なったのに・・・な・・・」

「そっだよ！これからじゃん・・・コラ陽葵！まだ夜じゃないよ!?寝ちゃダメ、寝ないで!!!」

その瞬間、救急車が到着し、救急隊の人が駆け寄ってきた。

「けが人は!?」

「こつちです！もう意識が・・・!」

「・・・!これはいかん。すぐに病院へ。おい!止血と応急手当だ!あなたは知り合いですか?」

「は、はい!」

「では一緒に病院まで」

「わかりました!」

ちょうど警察も到着し、あの子は確保されたようなのであたしは救急車に乗り込む。

「お願い……頑張つて、陽葵……！」

―そして今に至る。

……でもあの時のことを思い出しても仕方がない。

もう、過去は変えられないんだから。

あたしはやがて考えるのをやめ……目を閉じて横たわり、話すことのできない陽葵を背に歩き出した。

そのあとしばらくして自分の部屋に閉じこもってしまったんだ。

そう、まさにあの時の陽葵のように。

あの時は腑抜けになった陽葵をあたしが叩いたけど、逆はない。

あたしがどれだけ腑抜けになろうとあたしを叩きなおしてくれる人は―

もう、いないんだ―

※

ここはどこ……？

ああ、あたしの部屋だ。

部屋からほとんど出ず一日中虚無を感じているあたし。

あれから何日たったんだろう？

充電をしていないスマホはどうに電池が切れており何日かも、何時かもわからない。でもどれだけ落ち込んでいてもお腹は空く。

その瞬間だけはキッチンに誰もいないのを見計らって適当なものを拝借して部屋で食べる。

そんな生活が続いていた。

「陽葵のこと言えないや」

ふとよぎる陽葵の顔。

しかしその瞬間。陽葵のことを思い出した瞬間、突然涙があふれだしてしまった。

「え……?あれ……?おかしい……な。涙が……うう……ぐす……」

そこからはダムが決壊したかのように涙があふれ、そして声を上げて泣き始めてしまった。

「陽葵……!なんで……なんでええええええええええ!ああああああ!」

一度解かれた制御は収まらない。

あたしは泣く。ただひたすら声を上げて泣く。

「日菜!!」

「……ぐすつ……おねえ……ちゃん?」

「日菜!大丈夫!?つてなによこの部屋!?!」

おねーちゃんはあたしの部屋を見回して一言。

そう、あたしの部屋はかつての陽葵の部屋のようになっていたからだ。

そんな惨状になって、いることすらわたしは自分自身で気づいていなかった。

「日菜……あなたの悲しみの深さは痛いほどわかるけど……でもこのままじゃあなたが壊れてしまうわ！」

「……わたしは大丈夫だよ」

「こんな状況を見せられてはいいそうですかとはいかないわ。日菜、一度部屋から出ましょう」

「……っといてよ」

わたしは……. 言ってはいけないことをいつてしまった。

「もう放っておいてよ！おねーちゃんに何がわかるの!？」

「ひ、ひな……?」

ダメだ。これ以上は言っちゃダメ。

「あたしが…….」

やめて。とまって、あたし。

「あたしが刺されてればよかつたんだ」

「ーッ」

「あたしが刺されていれば！そうすればこんなことには……こんなことにはならなかつたのに……!!!」

バシッ!!!

刹那。大声を上げたあたしの頬にすさまじい衝撃が走り、目を開けると――

「……!!」

そこには大粒の涙を流して手を挙げているおねーちゃんの姿があつたんだ。

「お、おねーちゃん……?」

「言っつていいことと・・・悪いことがあるわ・・・」

これは同じだ。

「あなたがその人を想うように・・・ここにあなたを想う人がいるのをどうしてわからな
いの!!!」

あの時の・・・ボロボロだった頃の陽葵と一緒になんだ。

「どうして私をもっと頼ってくれないの・・・？せつかくまたちゃんど話せるようになって、
たった二人の姉妹なのに。あなたがいなくなったら私は・・・私は・・・！だから冗談でもそんなこといわないで」

絞るような声で言われたあたしは気が付いた。

あの時の陽葵と同じってことはこの現状はダメってこと。

今のあたしはあの時の陽葵でおねーちゃんがあの時のあたしってこと。

「……ごめんね、おねーちゃん」

「ひな……？」

「あたし……勝手に一人で、全部諦めて……おねーちゃんに迷惑かけちゃった」

「……妹は姉に迷惑をかけるものよ。でもいなくなるような迷惑のかけ方はしないで」

涙を流しながらもほほ笑むおねーちゃん。そしてそのままあたしに歩み寄り、そのままおねーちゃんのおたかさがあたしを包んだ。

「おねーちゃん……おねーちゃんああああん……」

「好きなだけ泣きなさい。今日は全部……私が受け止めてあげるわ」

あたしは大声でひたすら泣いた。

その間おねーちゃんはずっと抱きしめていてくれて、しばらくしてあたしはその胸の中で眠ってしまった。

最終話 偽りの幸せとクズの結末—TRUE END—

目を覚ますとおねーちゃんもあたしを抱いたまま眠っていた。

「ふふっ・・・おねーちゃんの寝顔、可愛いなあ」

まじまじと寝顔を観察するあたし。

こうやって二人でくっついて寝る機会なんて今はほとんどないからこの瞬間は貴重かもしれない。

スマホで寝顔を撮ろうとするが充電が切れていて動く気配はない。

「あ、充電充電・・・っとうわっ・・・」

おねーちゃんを起こさないようにすぐ近くから伸びている充電コードを差し、電源が入るとものすごい数の着信とLINE●Eが入っていた。

パスパレのみんな、幼馴染のみんな、学校のみんな。とにかくすごい数だ。

そして日付を確認すると5日前から毎日。あたしは5日間も何もしないでいたんだ……

—ひとまずみんなに謝罪の連絡を送る。

その瞬間着信が鳴り響く。

発信元は彩ちゃんだ。さすが彩ちゃん、普段エゴサしてるだけあって反応速度がすごいね！

『日菜ちゃん!?大丈夫』

「あはは……色々心配かけちゃったみたいでごめんね……うん、事務所には自分で……うん。ありがとう、彩ちゃん」

そこから色々話をする。どうやら近くに千聖ちゃんやイヴちゃん、麻弥ちゃんもいたみたいで変わりばんこで話したら結構時間が経っちゃった。

「うん、じゃあまたね。ありがとう、みんな」ピツ

ふう……

みんなの声が聞けてすごく安心してる。
そっか、あたしは一人じゃないんだ。

「ん．．．．」

あ、おねーちゃん起きちゃった。

「ひな．．．．？」

「おはよ、おねーちゃん」

うーん、寝顔を撮るのはお預けかあ．．．

ま、いつか！

p r r r r

あらら、また着信。こりや当分やみそうにないね。

そう思いながらもあたしは笑顔になっていて、次々と電話に対応していったのだっ

た。

※

「ふう〜」

「お疲れ様、日菜」

「ありがと、おねーちゃん」

電話の対応を終え、リビングで一息つくつと、おねーちゃんがお茶を持ってきてくれた。

ピンポン！

すると突然家のインターホンが鳴った。

おとーさんとおかーさんが帰るにはまだ早い時間だし配達か何かかな？

「私が出るわ。日菜はゆっくりしてないさい」

「はーい」

すると玄関先でおねーちゃんが対応する声が聞こえる。

すると足跡が二人分、家の中に入ってくる気配を感じた。リビングのドアが開くとそこには……

「陽葵のお母さん……?」

「氷川さん。先日はわざわざ来てくださってありがとうございます」

おねーちゃんに連れられてきたのは陽葵のお母さんだった。

「あの子の部屋を引き払うために整理したらこれが出てきて……あなた宛てになっていたのでわたさなきやって思ってた」

そういつて差し出す手には小さな箱と、あたしの名前が書かれた封筒があった。

あたしはそれを受け取り、そして封筒を開ける。

するとそこには手紙が入っていたんだ。

日菜へ

改めてこうやって手紙を書くのつてめちやくちや恥ずかしい・・・

まずは誕生日おめでとう。そんな記念すべき日なんだが果たして俺の告白は上手くいったのかな？

まあ・・・どちらにせよ言いたいことは一緒だけどね。

日菜、俺を変えてくれて、見捨てないでくれて本当にありがとう。

俺がこんなことを考えるようになったのも、いまこうやってるのも日菜のおかげだよ。

これからの俺の決意・・・つていうか今まで人に散々もたれかかってきた罪滅ぼしというわけじゃ

ないけど、これからは人を助けられるようになりたい。

今までの自分の平穩を考えるだけじゃなくて、人の役立ちたいんだ。

まずは一番の功労者である日菜からスタートかな（笑）

そして今まで仮面を被って無理してたぶん、日菜とのこれからは、自分の素を出して本気で楽しみたい。

悪いけど付き合ってくれると嬉しい。

とまあ慣れない手紙はこれで終わり！俺たちはこれからだし、これからも色々頼むな

！

P・S・一緒に入ってるペンダントは誕生日プレゼントです！

センスがないなりに選んだんだけどどうかな？

なんでも世界に一つの手作り品で、スピリチュアルな霊石を使つてるとかで願いをか
なえる効果があるらしい。

怪しげな露店のばーさんがいってただけだからまあオマケ程度に考えればいいよ。

「ばか……っ！ほんとこれからだつてのに……あたしだつて一緒に事考えてたのに……
！せつかく助けてもらったのに……でも……でも……！！」

手紙を読み終えた途端、感情があふれる。

そしてついに……ついに認めてしまう。

「死んじゃつたら何の意味もないじゃん……ばか！ばか陽葵……！！」

頭ではわかってはいたけど心がずっと認めていなかったコト。

“弓神陽葵の死”

手紙を読むことでその事実をついに認めてしまったあたしはただひたすら泣いた。

「そうやってあの子を想って泣いてくれて・・・あの子も少しは浮かばれると思います。外面ばっかよくて人に迷惑をかけてばかりの子だったけど・・・最後にあの子に向き合ってくれてありがとう。母親として、あなたに感謝します」

「日菜・・・」

「うわああああああああん!!!」

再びおねーちゃんも胸を借りて大声をあげて泣く。

そうやって泣くあたしの手には、手紙と一緒に入っていた、太陽の形をした天然石のペンダントが握られていたのだった。

※

— 夏 お盆

ノースリーブのワンピースに麦わら帽子。

日焼け止めもバッチリ。手には柄杓に桶。完璧(?)な夏スタイルだ。

「久しぶりだね、陽葵」

目の前にある「弓神家之墓」と刻まれた墓標にあたしは語り掛ける。

「もう半年くらいになるのかな? 早いよね」

でも帰ってくる返答はない。

それでいいんだ。過去は変えられない。

あたしが喋って呆れ気味に陽葵が答える。そんな日常はもう戻ってこないのはわかっている。

「やっぱ……さみしいよ陽葵……」

おつといけないいけない！

「でも、陽葵の分まで強く生きるって決めたから。弓神陽葵が生きた証として、あたしは生き続ける」

それは決意。

弓神陽葵はあたしの中で生き続ける。だから陽葵が確かに生きた証としてあたしは存在し続けるんだ。

「さて、しんみりしてても仕方ないから陽葵に水をぶっかけて帰ろうかな！」

“ ひ、ひなさん……？ 桶いっぱい水をとめてなにしてるんですかね……？ ”

“ なんだと思うー？ あははは！ 陽葵ビクビクしてる！ やらないよ！ 冗談だよ！ ”

“ なんだ、冗談か…… ”

きつと陽葵がいたらこんなやり取りをしているのかな。
だから……

「えいつ！」

バシャーン！

「やらないっていうのが冗談だよ♪」

陽葵の墓石にお水をかぶせ、あたしはそう呟く。

“冷たいいいいい日菜あああああ”

「……！」

陽葵……？

「・・・気のせい、だよね」

少しセンチメンタルな感じになっちゃった。

「ばいばい、陽葵。また来るね」

偽りの幸せで塗り固められた弓神陽葵の人生。

これが結末。それを語るのが本人じゃなくてあたしなのが何とも言えないけど。確かな決意と思い出を胸に。

でもやっぱりキミにもう一度会いたいという思いも抱きながら。

あたしはその場を後にし、確かな一歩を進み始めたんだ。

偽りの幸せとクズの結末—TRUE END—

—Grand Finale—

EX1. 偽りの幸せとクズの結末—HAPPY END

—I

気が付いたら体が動いてた。

俺の腹部に鋭い痛みが走り、力が抜け、その場に倒れこむ。

「なんで・・・お前が・・・」

そういつた瞬間—

すべて、すべてを思い出した。

あの時の光景を・・・

※

「おいおい、前を向かないと危ないぞ」

「へーきへーき！ほら、陽葵も早く早く！」

俺は調子に乗ってた。

日菜に告白し、受けいれてもらえた。その事実がなにより嬉しかったんだ。しかしその幸せは突然幕引きを迎えた。

ドンッ！

「あつすみません………!？」

「ほらみる日菜、人にぶつかつたじゃないか……日菜？おいどうしたんだ日菜？」

「は、陽葵………」

日菜らしくもない弱弱しい声で俺の名前を呼ぶ。

その刹那――

日菜は倒れこみ、その背中からは真つ赤な鮮血があふれ出し、ぶつかつた女の手には血に染まつた刃物があつた。

俺は氷川日菜を失ってしまった。

※

「あなたが！あなたがしつかりしていないから日菜は……！」

「紗夜やめなつて！その人を責めても日菜は喜ばないよ!?」

「今井さん……ですが……日菜……ううう……日菜ああああ……」

今井さんと呼ばれる友達になだめられ泣き崩れるお姉さん。

病院に運ばれたが日菜の双子のお姉さんが駆け付けることには日菜は遠いところへ行ってしまうていた。

「ねえキミ。今日は疲れてるだろうしもう帰ったほうがいいよ。それに……君がいると紗夜が落ち着けないからさ……」

「……そう、ですよね。わかりました」

その一言だけ言って俺は病院を後にする。

無心。ただひたすら、何も考えずに俺は岐路についた。

そして自宅に帰ると、机の上には—

日菜に渡すはずだった誕生日プレゼントが寂しげな眼で見ている気がした。

はじめて心を込めて書いた手紙。

初めて「好き」と思えた人のために選んだプレゼント。

箱を開けると霊石でつくられたという太陽の形をしたペンダントが顔を出した。

怪しげな露店のばーさんから買ったもの。怪しげのはずなのになぜか惹かれて買ってしまったもの。

これもすべて・・・すべて無意味な物と化してしまった。

「なんでだよ・・・日菜・・・なんで俺を置いてっちやうんだよ・・・」

今になって涙が出てきた。その涙はボロボロと落ち、手に持っていたペンダントへと落ちる。

「お前に日菜を守れるのか？」

なんだ？今の声は・・・俺の声・・・？

それを聞いた瞬間、光に包まれたかと思うと・・・俺は暗闇の中にいた。

“このままでいいのか？”

いいわけがないだろ。

暗闇から響く“俺の声”に返答する。

“ならば目指すか？ハッピーエンドを”

「あたりまえだ。目指すなら良い終わりの方がいいだろ」

“ならばいい”

“本当にいいのか”

“後悔しても知らないぞ”

「これ以上の後悔があるかってんだ」

そして俺は言う。

「日菜に—」

もう一度会いたい
—

刹那、俺は光に包まれ、3月20日の朝に戻っていた。
ここまでに至る記憶を失った状態で。

※

そっか・・・俺は・・・やり直したんだ。

そして日菜は・・・うん、ケガはない。それどころは敵を押しさえつけるパワフルっぷりを見せている。

そして周りの人に敵を預けた日菜は駆け寄ってきた。

日菜が叫ぶ声が聞こえる。

でもこれは俺が生んだ結果だ。俺がやったことであの女は襲撃をかけることを決意し、俺がいたから日菜は危機にさらされた。

そう、これは因果。これで収束するなら・・・日菜が生きていてくれるなら・・・俺は喜んでこの命を差し出そう。

そう、思ってたんだけど。

「でもやっぱ・・・死ぬのは怖いや・・・せつかく・・・日菜と・・・ちゃんと付き合えるように・・・なったのに・・・な・・・」

「そうだよ！これからじゃん・・・コラ陽葵！まだ夜じゃないよ!?寝ちやダメ、寝ないで!!!」

寝るなって無茶をいうな・・・

眠い・・・眠いというより何か怖いものが近づいている感じがする。

その予感的中し、やがて日菜の声は聞こえなくなる。

そして俺はそのまま眠りについた。

永遠の、眠りに—

※

……朝か？

目を覚ますと3月20日の朝。日菜とデートをする日。

しかしこの違和感はなんだろう……？

無意識で腹部を押さえてしまうが、特になにもない。

「……まあいいや。今日は張り切っていくぞ！」

俺は出かける準備を終わらせ、家を出る。

俺が出た後の部屋の机の上に……

日菜へのプレゼントを置き忘れていることに俺は気が付いていなかった。

EX2. 偽りの幸せとクズの結末—HAPPY END

—II

「ハッピーエンド・・・？」

なんであたしはこんなことこんなこと考えてるんだろう・・・？
なにが「なるほど」なんだろう？

「やばい、記憶がない」

この年齢でこれってやばいよ!?
直前に自分が言ったことの意図がわからないなんてよっほどだよ!?

「つてこんなことしている場合じゃないや！」

時計を見るとそろそろ出ないと陽葵との待ち合わせに間に合わなくなっちゃう。

うーん、まあ忘れるってことはどうでもいいことだよね！
とにかくいかなきゃ！

「日菜、どこかいくの？」

「あ！おねーちゃん！ちよつと友達と遊びにね。夕飯は食べてくるから今日はいらな
いっておかーさんにいっておいてくれる？」

「わかったわ。気を付けていくのよ」

「うん！」

とにかく出発だ。せっかく水族館にいくんだから楽しまなきゃ！

前みたいに暗い感情はもうない。

・・・はずなのに。

「え・・・？」

なんだろうこの感じ。本能が行つちやダメと警鐘を鳴らしてる感じがする。

それを自覚した瞬間、足が重くなり、体が小刻みに震えだす。

これはなに・・・？

「白菜？大丈夫・・・？」

「え、ああ、うん！じゃあ行ってくるね♪」

「ええ」

気のせいだと自分に言い聞かせあたしは家を出る。

そして、待ち合わせ場所につくと、すでに陽葵は到着していた。

※

「お待たせ、陽葵」

「別に待ってないさ。俺も今来たところだ」

「うんうん、デートの待ち合わせテンプレとしてはまあまあだね」

この違和感は何なの・・・？

この感じ、以前も感じたことがある気がする。

ただのデジャヴ？それとも・・・？

「どうしたんだ？ 日菜」

「ううん、なんでもない！ じゃあ、いこっか」

気のせいかな。

とにかくせつかくの陽葵とのデートだ。よくわからに違和感を気にするよりも楽しまなきゃ損だよねってことで電車に乗って目的地に向かう。

水のゲートにドーム型の水槽にしなやかな水流。その中を自由気ままに泳ぐ魚たち。それに歓迎されたあたしたちは笑顔だ。

でもやっぱりおかしい。はじめてくる場所のはずなのに見たことがある気がする。するとあたしの手が自然と横に伸びる。

コツン

すでに伸びていた陽葵の手をあたしの手がぶつかる。

「あっ……」

「なにー？陽葵そんなにあたしと手をつなぎたかったのかなー？しょうがないにやあー」

おどけた感じでいい、陽葵の手をしつかり握る。

あつけからんとしているけど内心はバクバクだったりしている。

「そ、そんなこと．．．ナイデス．．．イヤ．．．ソウジヤナクテ．．．」

「うふふ、可愛いっ」

「お、男に可愛いなんていうもんじゃないよ」

「うわ！陽葵に顔真っ赤！可愛い！」

「だからやめろって．．．」

端から見たら完全にバカップルだろうなー

あ、バカップルって言い方は古いかな？

その後、手をつなぎながら見て回る。

いろんな種類の魚、番いでじゃれるコツメカワウソ。

「おおおおおすいー！」

そしてやっぱり最後はイルカショー。

盛大な音楽と季節の衣装に身を包んだ女性トレーナー、そして観客にかかるほどの壮大な水しぶきを上げるイルカたち。

盛り上がるには十分だった。あたしたちは今まで見たことのないパフォーマンスに圧倒されたのだった。

「いやーこの水族館はアタリだったね！」

「ああ。まさかイルカでサーフィンするとは……」

各々感想を言いながら駄弁るあたしたち。

そして手は繋がれたままだ。やがて海沿いの公園に到着し、ベンチに腰掛ける。

しかしあたしは何か胸につつかえたような感じがずっと続いていた。

「あつ……この辺……」

「お、おう……」

このあたりはカップルがいちやつくスポットと化していたんだ。

街灯は薄暗く、二人掛けがちょうどいいベンチが並びソレを目当てに作られたと思うほど。

事実周りをどれだけみても男女のペアしか座っていない。

「移動する？」

「そうだな……いや。実は日菜……聞いてほしいことがある」

「……? なにかな？」

心臓が跳ねる。

「俺さ……この前、沙綾や燐子に謝ったとき。言われたんだ。変えてくれた人の事……」

「変えてくれた人の事、真剣に考えろって……そんな感じかな？」

「えっ? なんで知って……」

．．．わけがわからない。無意識に、そして不思議とこんな言葉が自然に出てきたんだ。

「あ、話の腰を折ってゴメンね」

「あ、ああいいよ。それでな．．．だから．．．その。こんな俺なのに真剣にぶつかってきてくれて、変えてくれて．．．日菜、ありがとう。日菜のおかげで今の、そしてこれからの俺がある。あの日二人と話して、日菜のためにも本気で、甘えることなく変わらなきゃって思えたんだ」

「ううん。あたしは手伝っただけ。ちゃんと変わったのは陽葵の力だよ」

「ははは．．．買いかぶりすぎだよ」

そんなことないと思うけどなー．．．

陽葵の頑張りを知っている。しかも傷つけた女の子と話してちゃんとそう思えるのはすごいと思う。

「それで．．．もうひとつ．．．えつと俺は日菜のことが．．．好きだ。今までのクズの俺としてではなく、純粹に女性として。氷川日菜のことが大好きだ」

不意打ちにも思えるこの一瞬。あたしの心臓は鼓動が高まり、ドキドキしている。

「……………えーつと」

でもなんでだろう・・・？どこか告白される準備ができていたようにも思える。

そんなことを考えているとしばらく沈黙が続き、徐々に不安そうな顔に変わっていく
陽葵。

それを見てあたしはさすがになにか喋らなきやつて思つて口を開いた。

「陽葵さ……………。前に聞いたよね？なんで俺を助けるのかつて」

「あ、ああ」

「それがね。答えなんだ」

「どういうことだ？」

あたしは深呼吸して、そして言い放つ。

今まだ押し殺してきた想いをすべて、素直に。

「あたしも陽葵のことが好きだから」

※

「あ、日菜に渡したいものがあるんだ」

「んー？なにになに？」

手をつなぐどころか腕に抱き着きながら歩くあたし。

そういえばあたしの誕生日だったなー

でも陽葵プレゼント家に忘れてんじゃん！おつちよこちよい……

アレ……？

“なんであたしは陽葵がプレゼントを忘れたことを知っているんだろう？”

「あ……つごめん……家に忘れた」

その直後・・・あたしの考えていたことがピタリと当たってしまった。
とりあえず違和感を悟られないため、いつも通り振る舞う。

「もう～おつちよこちよいさん！あ、じゃあ今から陽葵の家に行つちやおう！」

「え!?!今から来るの!?!」

「なにー？ダメなのー???彼女に見られたくないものでもあるんだー」

「そ、そういうわけじゃないけど」

「よしっ！じゃあ決まり！」

嬉しくなつて陽葵から離れ、陽葵の方を向きながら後ろ歩きするあたし。

「おいおい、前を向かないと危ないぞ」

「へーきへーき！ほら、陽葵も早く早く！」

この刹那――

突然心臓の鼓動が早まるのを確かに感じた。

「日菜あああああああ！」

突然叫ぶ陽葵。後ろには殺気を放つ気配。

あたしは――

ドゴ！ガシツ！

「なっ!?!」

「ぐおおおおお嘘だろおおお」

こちらへ来る陽葵に申し訳ないけど蹴りをお見舞いして遠ざけ、腕で後ろから迫る何かを掴んだ。

この行動にあたしの思考は絡んでいない。

なぜかこうしなきゃって思っ、体が無意識に動いたんだ。

「放せ！放せこのお！」

暴れ、叫ぶ女の子の声。それを聞いた瞬間・・・
あたしはすべてを思い出した・

「！」

そっかあたしは・・・

「やり直しているんだ、あの日を・・・！」

凶器を女の子の手からねじり落とし、地面にたたきつけて制圧するあたし。
その光景を陽葵や通行人は静かに見ていた。

EX 3. 偽りの幸せとクズの結末—HAPPY END

—fin

警察が到着し、連れていかれる女の子。

あたしと陽葵はその様子を後ろから見ていた。

「あいつ・・・昔俺を刺したヤツなんだ・・・」

「・・・そっか」

“ 知ってたよ ” その言葉を飲み込む。だって未来から来た (?) なんていつたら頭のおかしい人じゃん。

二人してぎこちない会話を続けるけど、ほんとは今すぐに陽葵を抱きしめたい。ぎゅつとして生きててよかったって言いたい。

でもここでそんなことをするわけにいかないし、我慢だ。

「あなた達にも話をききたいんですが・・・」

警察の人が話しかけてくる。

しかし警察の事情聴取は明日になるとうことで、あたしたちは帰宅を許された。

帰り道――

あたしたちの間には会話がなく、歩く。

やがて陽葵の部屋に到着し、靴を脱ぎ、荷物を下ろす。

「ごめん……日菜」

陽葵が謝ってきた。

「なんで謝るの？」

「せっかくの誕生日なのに、せっかく付き合えたのに。結局俺が昔やったことが原因で日菜を危ない目に遭わせちゃったから」

「……気にしてないよ。陽葵こそケガがなくてよかった」

あたしは気づいた。自分の顔に違和感があることを。

そう、瞼が熱くて、それが顔を伝ってるんだ。

「な、なんだよ日菜・・・なに泣いてるんだよ・・・」
「うっさいバカ陽葵。キミこそ泣いてるじゃん・・・！」

あたしも、陽葵も目から大粒の涙が流れていた。
そして—

「陽葵・・・！！」

「日菜・・・！！」

あたしたちは強く、強く強く抱き合った。

精いっぱいので、潰れちゃうんじゃないかと思う力で思いつきり抱きしめた。

「陽葵・・・陽葵いいいい・・・」

「な、なんだよ。日菜ってそんなに泣き虫だったのか」

「だってえ・・・だってえ・・・もう一度こうできるなんて思ってたから・・・」

もうこのぬくもりを感じることはできない・・・そう思っていたのに。
あたしの悲しみは一気に喜びに変わったんだ。

「そっか・・・俺も・・・！」

あたしたちは感情をオープンして泣いて、抱き合つて、もうよくわからない状態だった。

そして落ち着くころにはすでに夜中になっていた。

※

「やば・・・おねーちゃんとおかーさんから着信入ってる」
「あー・・・もうこんな時間か。春休みで明日も休みとはいえ、さすがに一回帰らなきゃな。送ってくよ」

陽葵が立ち上がり、外出の準備を始める。

それを見たあたしはとっさに、体が勝手に動き……陽葵の手をギュって掴んだんだ。

「日菜？」

「……イヤ」

「え……？」

「帰るの、イヤ。今日は陽葵と一緒にいたい」

※

なんてことをおっしやるんですか日菜さん。

え……？俺と一緒に……？ってことはもしかして……もしかしなくてもそういうことなのか……？

確かにそれなら俺も嬉しい。

もう会えないと思っていた日菜にまたこうして会えているんだ。

一緒にいられるならずつと一緒にいたい。

「日菜と家の人がいいなら……」
「……! うん、すぐ電話してくる!!」

そういつて日菜は電話をしに外へ出る。

その間、俺は今日のことを考える。俺はかつて日菜の死を目の当たりにしたこと、そして俺はそれを回避する代償として一度死んだはずであること。

そして霊石のペンダント力かわからないが今こうやってもう一度生きていて、日菜も俺も死なないイマを作ることができたこと。

『やり直しているんだ、あの日を……!』

『だってえ……だってえ……もう一度こうできるなんて思ってたから……』

そしてふと思いつく日菜がつぶやいていた言葉、そして俺に言った言葉。
さらに言ってしまうば過剰といえるまでにさつきまでのやり取り。

日菜があれだけ泣くなんて珍しいどころかみたことなんてない。

「ちよつと待て、これはどういうことだ・・・?」

まるで日菜は“俺とはもう二度と会えないと思っていた”みたいじゃないか?

そう、日菜が発した言葉は“日菜とはもう二度と会えないと思っていた”俺の心情をそのまま表してる言葉だったのだ。

「警察から連絡いってみたい・・・でも外出るの怖いから友達の家泊まるって言ったらOKだつてさ!」

日菜が帰ってきた。嬉しそうにそうやって俺に報告する。

「そっか、嬉しいな」

「うん! あたしも!」

ベッドに横たわった俺たちはしばし歓談し、俺はついに気になったことを話したのだ。

※

「なあ日菜・・・変なこと聞いてもいいかな」

「なに？陽葵が変なのは今に始まったことじゃないけど」

「さりげなくひどいな・・・アイツに襲われたときにつぶやいてた言葉。あの日をやり直してると・・・どう意味なんだ？」

ベッドの上であおむけになり駄弁っていたあたしたち。

すると突然、核心を突く言葉。まさか陽葵に聞かれていたなんて。

「えっと・・・それは・・・」

なんて答えたものかわからなくていい淀んでしまう。

そりゃ陽葵は一回死んじやって、時間が巻き戻って今になってるなんて絵空事、信じられるわけが・・・

「もしかして・・・日菜も・・・繰り返しているのか？」

信じそうな人いたー!!!

ってちよつと待つて、それって……

「え……?」も?」?」つてことはもしかして陽葵も戻ってきたの……?」

その言葉ですべてががながつた。

やり直したのはあたしだけじゃなかったんだ。

陽葵の口から語られたのはあたしが一度死んでしまったこと。そしてその過去を變えるためにペンダントの力で戻ってきたこと。

次に陽葵があたしの身代わりになって死んでしまったこと。おそらくこれがあたしが経験したことだろう。

つまりあたしたちはそれぞれを助けるために一度ずつやり直したんだ。

「あたしと……同じだ」

「なるほどな……」

話がまとまった瞬間、あたしは感情を爆発させた。

「なっ!?!日菜・・・むぐっ」

あたしは起き上がり、横たわる陽葵に覆いかぶさった。

そしてそのまま・・・唇を奪いに行っただ。

「陽葵・・・」

そしてあたしは再び、力いっぱい陽葵を抱きしめた。

「陽葵・・・生きてるっ・・・あつたかい・・・!陽葵・・・会いたかったよ陽葵・・・!」

お互いが同じ境遇にあるということを知り、感情を隠す必要がなくなったあたしは大爆発した。

それは陽葵も同じようで、あたしがこうやって生きていることを心の底から喜び、ま

たしても二人で泣いてしまった。

「日菜・・・好きだ・・・」

「あたしも・・・大好きよ、陽葵・・・」

重なる唇。そして布のこすれる音。重なる肌と肌の感触。

無音の部屋に鳴り響くそれらは、やがて幸福感へと変わり、あたしたち絆をより強いものへと変えていった。

※

あれから何十年たったかな。

今やあたしはしわしわのおばーさん。

そしてあたしの隣には陽葵はいない。

その代わりにおじーちゃんになった陽葵がにっこりと笑う写真が立っている。

「まったく、あのしわくちやジジイめ〜こんな美人をおいて先に逝っちゃうなんてなあ」

そう、陽葵ったらあたしより先に遠いところに行っちゃったんだ。

とはいっても誰かに殺された、とかじゃなくて普通に歳と病気によるものだ。

最後は子供たちに、孫たちに、そしてあたしに看取られながら安らかに、そしてゆっくりと旅立っていった。

「ねーねーおばーちゃん！このペンダントってなに？」

「ああ、それはね・・・」

孫娘が持ってきたのは太陽を模した霊石のペンダント。

あたしと陽葵にハッピーエンドをもたらしてくれた功労者。

「おばーちゃんとおじーちゃんの命の恩人だよ」

優しく、あたしはさういう。

・・・さて！と、いうわけでこれが本当の弓神陽葵の結末。

塗り固められた偽りの幸せはすべて剥がれ落ち本当の幸せへと変化を遂げた。

そしてクズはクズでなくなり、妻に、子供たちに孫たちに囲まれて安らかに終えることができたんだ。

—ねえ陽葵。陽葵は最後、幸せだったかな？

あたしは最後の瞬間まで幸せだったよ。そつちに会いに行くまでまだ時間がかかりそうだけど、もう少し待っていてくれると嬉しいな。

『うん、待ってる。あ、でもあんま急がなくていいからね？ ゆっくりこつちにおいて』
漠然とそんなことを考えていると、あの時の・・・昔の陽葵のままで。
そんな声が聞こえた気がしたんだ。

〈fin〉

—EX:Ten years after—

第1話 二人のみらい

「あたしたちって付き合って何年だっけ」

「そろそろ10年になるなかあ」

「だよね」

あたしは今年で27歳。

最近はパスペレより個人のお仕事が多い。とはいっても10年前の解散騒動のように物騒なものじゃなくて現状を考え見た結果だ。

それを証拠にパスペレは解散になってないし、今でも定期的にライブを行う。

「でもなー」

そう、もう27。20代後半、アラサー。

いくらアイドルといえあたしは女の子。もう10年も付き合ってるんだしそろそ

ろ……って思うことが最近よくある。

もちろん事務所に話を通さなきゃいけないし、色々準備は必要だけど。

「なんだよ白菜？」

「いんやー」

当の陽葵がこれだもんね。

陽葵はもともと保身最優先のクズ野郎（火の玉ストレート）だっただけあって自分から動くことはほぼないといっている。

うーん、芸能界は30過ぎての結婚もわりと普通だしあたしも覚悟しておいた方がいいのかなー？

別にこんなことで陽葵を嫌いになったりしない。ありがちな「●年付き合ってるけど結婚の話がでないから不安になる」ってこともない。陽葵にすっかり愛されている自信もある。

「ねえ陽葵」

「なに？」

「あたしのこと好き?？」

何の前触れもなく陽葵に質問を投げかけるあたし。

陽葵は少しびびくりした感じで答える。

「な、なんだよ急に・・・」

「あー！陽葵質問を質問で返したー！そんなことしたら爆弾に変えちゃうぞー」

「キラ●クイーン?!?! ジョ●ヨネタわから人に通じないネタはやめろ！」

「ごめんごめん。で、どうなの？好きなの？」

「す、好きに決まってるだろ・・・」

「愛してる?？」

「あいし・・・!? あ、愛してるよ・・・」

うーん、るんっ♪つてきた！

「一体急になんだ・・・ぐむっ!？」

「んー!？」

そしてあたしは陽葵の唇を奪いに行く。

「ふう・・・よし！」

「日、日菜・・・？ いったいこれはどういう・・・？」

「これでもダメかあ・・・」

はい、ここから回想。

あれはパスパレの練習終わりのことだった。

「ふふ、日菜ちゃんも女の子なのね」

「あー！ 千聖ちゃんなんか悪い顔してる!!」

「そんなことないわ。あなたのことをちゃんとわかってくれて、ここまで愛してくれる人だもの。色々経緯はあったと思うけど、私は日菜ちゃんの幸せを応援するわ。でもあなたは芸能人であることは忘れないで？ ちゃんと段取りするのよ？」

「段取り・・・？ あーそっか、そうだよねー」

以前千聖ちゃんに少しだけ相談したとき、こんな感じだった。

改めて千聖ちゃんは頼りになるなーって思ったんだけど、なんでそれが今回の行動につながるかというときさらにはこんなアドバイスをくれたからだ。

「じゃあ日菜ちゃん、陽葵君がその気になるように少し強引に迫ってみたらどうかしら？」

「それだよ千聖ちゃん！」

とまあこんなやり取りがあったわけだけど……

「強引……ごーいん……これはちよつと違うのかなあ……」

「なんか要領を得ないがほんとにどうしたんだよ」

あ、陽葵ほんとにわからないって顔してる。

「付き合ってる男女が愛を確かめ合ってキスするくらい普通じゃない？」

「そうだけだよ。なんかいつもの日菜らしくないっていうか」

「そうかな？ま、いいや！あ、もうこんな時間。じゃあ陽葵、今日は帰るね！」

「あ、ほんとだ。送っていいこうか？」

「んー、玄関先だけでいいや」

そしてあたしは帰宅の準備を始める。その最中、これからのことを色々考えていた。

とりあえず事務所に付き合っている人がいることを話して周りを固めて、さらに外堀を埋めつつそして陽葵をその気にさせて・・・

色々考えることあるなあ。

「じゃあ、気を付けてな」

「うん、じゃあね陽葵！」

そういつて玄関先からでお別れするあたしたち。

でもこの時のあたしはそんなことをする暇がなくなること知らなかった。

そうあたしは気づかなかった。

あたしの姿を捉える闇夜のレンズに――

パシヤツ!!!

「え?!?!?!」

刹那、フラッシュが光る。

驚いて陽葵とともに目線を光が発せられた方に向けると・・・

「あ、あれは・・・!」

その目線の先には・・・雑誌記者と思しき男の人が立っていたのであった。